

元禄の筥器と古語への夢

日名子 洋

方言と地元の平語

別府の竹製品とヒラゲチ 別府の温泉は最古の史料である『豊後風土記』に記録され、入湯客の竹細工も想定される。その竹細工にも方言(地元では平語という)が多い。明治以降は地元卸商が販路を全国に拡大したので取引上業界では使わないが、平語の一つがシヨウケである。シヨウケのほかにも①ガゴウ↓熊手、②バイスケ↓菊底の大筥、③タラシ↓四つ目網の水切り、④パッチョロガサ↓番匠笠など際限なく方言が多く、中には古語と考察される語も伝承されている。

シヨウケと地元の認識 これを橋本文彦(一九一六〜八五)が朱竹同人の名で『豊州雑筆』に「しよウケ考」と題して地元の認識を次のように要約している。

(中略)今は余り見られないが、味噌コシに用いた

円筒型のザルがそうであり、安来節に用いる大ザルは勿論、土工がモッコ代わりに使うザルや農夫が堆肥を撒くのに使用する小判型のザル、さては夏のあいだ飯を盛るカゴの類までがことごとくシヨウケの名のもとに呼ばれてきた。コエジヨウケ・メシジヨウケと言うたぐいであるが右に挙げた中にもザル又はカゴと呼ばれるものがないでもない。茶碗類の水切りに用いるカゴを茶碗メゴと呼び、他のカゴにもそれが用いられる例がそれであるが、おもにザルを称してシヨウケと併用する場合が多いであらう。

(後略)

民芸品とシヨウケ 別府では毎年秋に新作展が開かれ、美術工芸品・伝統工芸品・産業工芸品の三部門に区分している。この伝統工芸品になるシヨウケは調理土や麵類

専門店での静かな需要（合成樹脂製品が化学反応で黒くなり微妙な味付けに影響する理由）に市郊外の農村副業者が僅かに供給する程度になってしまった。

ショウケのエレジー ショウケは戦前に第一のピークがあった。昭和12年の大分営林署調査によると、別府では①釣竿（一本竿・継竿）、②旗竿・柳竿・運動用具竹竿類、③窓掛用竹簾、④熊手、⑤花生籠、⑥花臺・ハネツルベ、⑦衣装籠・書類籠、⑧籃胎漆器、⑨挫き物類、⑩臺所用具、⑪小籠類、⑫竹製小食器類、⑬割箸、⑭竹人形・船その他、⑮柱掛の15種類に大別している。その内臺所用具は過半数の生産額を、二千人の工人の七分の二を占め、ショウケ生産はその中の熟練者達であった。

第二のピークは合成樹脂製品（型枠で同時に形成される廉価）の出現に席巻された。その経過を元・別府竹製品卸商業組合の長谷川由次郎副組合長が経験的な見解として『別府の竹製品』（昭和四十四年）の中の「品種別各年間生産状況」に次のような激減比率を述べている。

ミソコシ	20	25	26	30	31	35	35	40	41	44年
	30%			30	27	18		3		

米揚爪	10%	8	8	5	2
飯籠	10%	10	8	5	
手提籠	10%	10	10	8	5

この臺所用具類を別名で青物系統というが、これらの激減分は盛爪やオシポリレ等に転換していった。

ダサイ青物とイノベーション この青物とは竹材の油抜き工程段階で自然乾燥の陰干しである。また白物とは湿式乾燥の苛性ソーダ（又は熱湯）処理と違った製竹である。

実用的な青物は使い込むほど鉛色となり水や日照に耐えた健康色である。装飾的な白物は黄白色で保存に手数がかかる。オリジナルな薄利多売の青物は工人にとってデザインなど技術欠如というダサイ評価をしている。

ショウケの需要激減に加えて、マダケの開花病が相乗化し、製品は台所から水気のない居間に代わる品物に技術革新を余儀なくさせられた。

ヒゴ材の生態と呼称圏

県内のショウケは全国でどんな方言を使っているのか。これを追求するためにショウケの一種である米揚爪の材

料となる原竹の生態に仮設を立て分類して見よう。

ヒゴの原竹と地域 竹ヒゴの原竹（柔軟性のないモウチクを除く）はマダケ・シノダケ・スダケ・ネマガリダケ等が多い。マダケでも寒冷な東北・甲信越は小桿でハザ（稲架）等の丸竹で利用するが、ヒゴの原竹はもっぱらシノダケ（高山地帯は篤竹）である。

工藤員功の『あるくみるきく（一九七三・No.75・近畿ツーリスト）内 日本観光文化研究所』の「米揚箒」の原竹をみると能登半島の三尾（富山・氷見市）と名張市（三重）を結ぶ線でわかれている。東日本の落葉樹林帯がシノダケ材ヒゴ圏であり、西日本の照葉樹林帯がマダケ材ヒゴ圏である。称呼名も前者はザルだが、後者はシヨウケ・ソウキ・イカキ等と多く分布している。

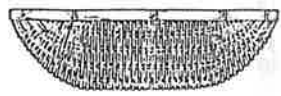
底技法の分類 第二点はシノダケ材ヒゴ圏の縦ヒゴが二本寄せ編技法で、底は上下下方型の四角で腰の部位まで網代編特有の右図のように縦ヒゴが

（『図説・竹工芸』から）



斜めになる深箒である。この型は平面に置いて安定していて、グラつかない。しかし西日本のマダケ材ヒゴ圏の米揚箒は下図のように、底から同一のござ目編で平面に置いた場合グラつく。これは籠の字意の「詰め込む」でなく、箒の字意の「上に載せる」という目的にあった構造といえるのである。

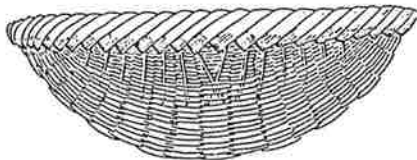
（『図説・竹工芸』から）



マダケのヒゴ材・縁材の伐期 第三点はマダケ材ヒゴ圏の原竹伐期は四〜五年生であるが、縁材の伐期が違っている。それは九州（薩摩を除く）では下図のように当年生伐期のマダケ巻縁圏となり、中・四国以东は四〜五年生伐期のマダケ榎目当縁圏であり氣候によりマダケの生態がヒゴの活

（『図説・竹工芸』から）

用に影響している。前者のマダケ巻縁圏が九州のシヨウケ称呼圏であり、後者がソウ



（『図説・竹工芸』から）

キ(ソウケ・イカキ等) 称呼圏である。なお、この仮設には鹿児島県や東海・関東地方での詳細な資料が必要となるが本稿では省略する。

五つのシヨウケの型

前掲の朱竹同人のシヨウケ見解のジャンルから、前述の箆の字意の解説で理解されるように、味噌コシ・飯籠のうち鼓型・茶碗メゴを除くものを、次の五つのシヨウケのジャンルを私見であるが分類したい。

コメジヨウケ(米揚箆) シヨウケの基
本型で、縁外形が真ん丸となる。朱竹同人が安来節の小道具と指摘のドジョウすくいや梅・雑魚を干す等の米を研ぐ以外の用途も多い。勝山町(岡山)では下図のような大型(18ℓ容量)をダンガメゾウケと呼び東京ではカメノコザルと呼称している。なお、別府では掛作り(熟練品)・平作り(普通品)・圓作り(粗雑品)があった。イナリグチ(片口米揚箆) 穀類を研ぐ専用の箆といえ



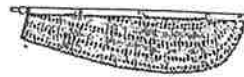
(『図説・竹工芸』から)

る。一般的には縁外形が後述のエビジヨウケに似て三方縁であるが、別府を含む九州ではイナリ口といってタマゴ型全周縁の尖端縁下が開口している。これは板野町(徳島)のドジョウグチの称呼名とよく似ている。

マダケ榎目当縁圏のソウケ系やイカケ系は縁がそれぞれオムスビ型か中間型(オムスビとタマゴの)となる。メシジヨウケ(飯籠) 夏季に布巾で包んだご飯をこれで吊るしていた。大分宮林署が昭和12年に調査した資料では別府の飯籠の形質を技法の違う鼓型蓋付と蓋ナシの二つに細分している。この前者の菊底U字逆U字型のため飯籠という籠の字が使っているが、後者は右図のようにコメジヨウケに握手と丸竹(底に)を付けた(蓋は巻寿司の簾を被せた)ものである。コエジヨウケ(肥撒箆) コメジヨウケの真ん丸縁型を



メシゾウケ (『図説・竹工芸』から)

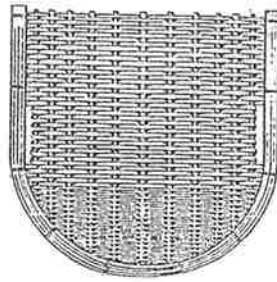


イナリグチ (『図説・竹工芸』から)

小判型にして片手で抱え易くしたシヨウケという。田畑に堆肥を撒くのに使われたが、この短口径に丸竹を付けものを佐知(下毛郡三光町)ではドジヨウスクイという。エビジヨウケ(土箆) エビジヨウケは箕箒(米のゴミを風選する道具)に似ているが、土箒というように土木園芸用に使われる。

その構造の相違点は
①網目がエビジヨウケがござ目で箕が網代目である。②腰立ち(底と胴の堺の部位)がエビジヨウケ

エビジヨウケ
('図説・竹工藝'から)



が曲線的で箕が鋭角的である。③縁の型はエビジヨウケがU字型で箕が逆台形型である。④縁材はエビジヨウケがマダケ柾目当縁であり箕は木質(材はアオバ・山ピワ等)の蔓巻縁である。⑤両端縁の握手部分の縁下はエビジヨウケが右図のように開いていて箕は開いていない。しかし卸業者や工人はこの差を意識していない。

元禄の筥器

別府のシヨウケの資料を辿ってみると、約三百年前の『豊国紀行』(貝原益軒・元禄七(一六九四)年)となる。それ以前は平語か古語かは確認できていない。

益軒の明礬見聞と筥器 この『豊国紀行』の別府に関する部分の抜粋は大正14年版『豊後・速見郡史』や昭和60年版『別府市誌』に引用されているので既読の人々も多い。

この史料は立石村(現・大字南立石)の明礬(後の鶴見)では全国の七割のシエアー)採取を見聞している。

その製造工程を詳述した中に道具としてシヨウケ(種類や形状は不記載)を筥器の漢字で記録している。

筥と筥器の呼称 この筥器の筥は古代中国の周(前11〜7世紀)の一斗二升(18ℓ・現在の一斗)入りの竹製・飯櫃で今のメシジヨウケに相当する。だが、明礬採取にはエビジヨウケが妥当であるが、どの種類か不明である。

その後の史料に三百年間現在まで筥器が記録されていないので、元禄の頃に儒学者・益軒だから筥器を識字していたのか、それとも益軒が平語の表現を造語したものかは今後の研究課題であろう。しかし、当用漢字でない元禄の筥器を別府のPRに活用したいものである。

他のシヨウケ漢字・五説

箎器説と宗器説 『豊国紀行』から27年後に出版された『和漢三才図會』（一七二一年）には米稔箎などに箎の漢字を使用しているが箎器の漢字はない。飯籊など籊を使う漢字が多い。しかし現在はマダケ柎目当縁圍で多く方言の称呼名に慣用している。別府でも郷土史家・福田紫城も昭和20年代の資料に箎器とルビを付けて慣用して、最も一般的な称呼名である。

また、宗器説は勝山町（岡山）等で慣用しているが、シヨウケと読めず、竹ヒゴ製に限らず「祭器や伝家の宝物」を宗器と総称しているので、台所用具の漢字に当てるには疑問視されるようである。

箎箎説とシヨウケの疑問 前掲の朱竹同人が別府業界独特の編子制度（分業としての内職）の最賃制指導の立場からシヨウケを方言と認識して、昭和31年頃竹カムムリの字から箎と箎の字を選択して造語したと「しよウケ考」で述べている。この箎箎説の功績はシヨウケの伝承をテーマとした別府でのカゴの伝承を提起し、次に触れる塩桶説を誘因したことであろう。

しかし箎箎説の欠陥が箎が音読みで、箎が訓読みである。これは重箱読みで、古語とは縁遠いようである。

塩桶説と簀桶説 この両説はともに漢字の訓音で構成している特徴がある。塩桶（戦前は鹽桶でニューアンスが異なる）も簀桶もシヨウケの発音とは近似している。しかし桶の字は、わが国の容器が時代とともに箱や箎のように竹質から木質に推移したことは認めても、逆に木質から竹質に移行することはあり得ない疑問が起きる。

塩桶説はシヨウケに対する朱竹同人の懷疑を受けてその畏友である某氏（大分県民俗考古学会・別府地区委員）が提起した創作伝承のようである。

この塩桶説は昭和31年12月付地元新聞・文芸欄に「別府の木地師新吉と竹カゴ」と題して「ダルマに耳をつけた形のカゴ」がシヨウケの起源というユニークな伝承を創作したので、ご記憶の県民も多いであろう。朱竹同人は塩桶説に反論して「しよウケ考」に「承知するわけにはまいらない」と否定しているようである。

最後に同じ訓音の簀桶説は、新潟県工業技術センター佐渡指導所の昭和43年頃の調査で地元の称呼名に簀桶を

発見しているがその起源は不明である。佐渡の同土団
(大正六〇昭和五年存続の全寮制・実業補習学校)の資
料を手始めに箕桶の歴史を今後検討すべきであろう。

これは、昭和41年作成の別府職業訓練所・教科書『竹
工』(別府から佐渡へ伝播説もある)や、一九四七年の
佐藤庄五郎著『図説・竹工芸』に箕桶の記述例があるの
で、初心の後継者間では広く確認されている。

古語へのアプローチ

これまで、近世(江戸時代)以降のシヨウケを史料に
より考察してきたが、紙数制約のため中世以前のシヨウ
ケは別の機会に割愛することとなった。そこで表題の後
半に挙げた「古語への夢」について若干触れて見たい。
呉音と漢音の相関 シヨウケが先かソウキが先かにつ
ては經典の読誦に現在も呉音が使われているように先ず
呉音がわが国に伝来し続いて漢音が普及したので、その
相関関係が検討のポイントとなるであろう。

万葉仮名へのアタック イナリ口を佐那河内村(徳島・
名東郡)ではクチイカキという。また京都の称呼名に伝

承される以加岐も11世紀の小大君集で蜘蛛の巣の古語で
使われている。また竹の万葉仮名は『日本書記』で駄聞
・陀気と、『万葉集』で太気と、『延喜式』で多気と、
『和名抄』で太計と書くようにシヨウケ・ソウキのキと
ケの解明は万葉仮名がポイントと推理できる。

水稲伝播説との関連 シノダケ材ヒゴ圏の東北・甲信越
にはシヨウケに相当する称呼名がなくザルだけの伝承で
あることから、シヨウケは水稲が伝播した弥生(または
縄文晩期)時代と仮定して推理することが可能となる。

その鍵は古代中国の米揚策たる籐の字にわが国の訓音が
ないのと同じように『魏志倭人伝』に記録の竹ヒゴ製タ
カツキたる逆(わが国の遺跡から出土していない)の字
に訓音がないこと等がポイントとなるであろう。

旧石器時代への道 さらに、夢は縄文時代や旧石器時代
へ広がる。別府の生活圏(三万年〜十数万年前)の中心
であったといれる早水台遺跡(日出町大字川崎)の石器
(否定する学説もあるが)でつくられたシヨウケの可能
というよりも、抱負をウタカタの夢として持ちたいもの
でありたい。